

岡山大学報告

- 岡山大学　救命救急科　野島　剛
- 熊本大学　救命救急科　小原　隆史
- 岡山大学　看護師　木口　隆・林　大輝
- 岡山大学　薬剤師　小野澤　壮平
- 岡山大学　臨床工学技士　平山　隆浩
- 岡山大学　救急救命士　有井　嵩典


臨床工学技士
薬剤師
救急救命士
看護師
・感染専門看護師
・救急外来看護師
医師
・救急専門医×2
・小児科専門医
・内科専門医

多職種での活動による気づき

- 他職種での専門性・役割に応じた対応が可能であった
  例）避難所アセスメント

職種	役割
医師	状態の悪い避難者の診察
看護師	保健師としての避難者のアセスメント 感染管理面からのアセスメント
薬剤師	避難者の薬に関する不安への対応
臨床工学技士	水、電気などのライフラインに関するアセスメント
救急救命士	避難所の危険な箇所の確認と周知

各々の専門性を持ち、被災者のために活躍できた、と思う
大きな組織であるため、多職種での出動は可能
ただ、出動調整が難渋するのは課題







救急救命士により危険な箇所の同定と対応策を
管理者と協議して対応





感染専門看護師はトイレ・手洗いなどの
衛生面を確認

訪問1日目



訪問2日目



避難所でも配給に関して改善点を提案



被災クリニックの院長「ほっておけない」 避難所通い、診療に奔走―震度７の宇城市・熊本地震

時事通信 編集局　　2026年08月20日14時55分 配信



避難所で診察する桑原仁士院長（奥）＝７日午前、熊本県宇城市小川町

熊本地震で被災したクリニックの院長が、地元の避難所で診療や健康相談を続けている。「ほっておけない。やれることをやるだけ」。「ダイヤモンドシティクリニック」（宇城市小川町）の桑原仁士院長（６１）は、地域のかかりつけ医としての役割を果たすべく奔走している。

避難生活、足元から支援　エコノミー症候群や転倒予防―サロン経営の女性奔走・熊本地震

- 地域の医療につながるように、各部署と連携
- 地域医療の医師に被災者の状況引き継ぎ
- 熊本県栄養士会に栄養に関して相談、引き継ぎ





もう一つの課題



もう一つの課題

- 岡山大学救急科の医師が熊本帰省中に被災
- 本人と家自体に被害なし
- 熊本のために働きたい想いが強いが、常勤場所が熊本に無くニート
- DMATの資格を持っているが活かしようがない状態

→　岡山大学DMATとして登録
　　熊本県庁で小児リエゾンとして活躍

後方支援で思うこと





- 現場で働いている時のサポートは各部局で違っていた
- 派遣後の休みに関しても、各部局で異なっていた（翌日から仕事の部署も・・・）
- 総じて、全体での体制整備が必要と個人的に思ったが・・・

本派遣の気付き

- 多職種で出動すると、各職種の能力、多角的な視点が入るので現場では役立つかもしれない
- 被災地にいる同僚をどのようにすれば活動できるかの試金石となった可能性
- 災害時に現場で現地医療者と遭遇することができれば、実情踏まえて情報交換が可能となり、次の医療に活かせる
- 大組織ならではの後方支援をどうするか
- 派遣後の休みをどうするかは大問題